

令和7年度

富山市民 感謝と誓いの つどい

とき 令和7年8月1日(金) 午後1時30分

ところ 富山国際会議場 3階メインホール

主催／富山市民感謝と誓いのつどい実行委員会・富山市

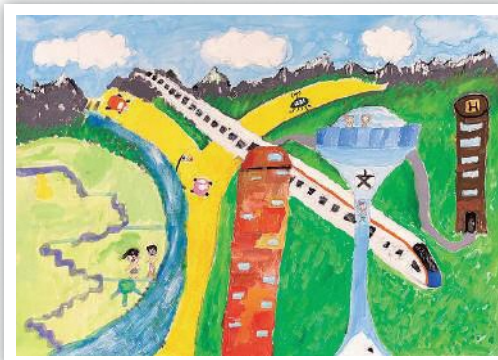
富山市自治振興連絡協議会
富山市老人クラブ連合会
富山市母親クラブ連絡協議会
富山市中学校長会

富山市社会福祉協議会
富山市民生委員児童委員協議会
富山市PTA連絡協議会

富山市遺族会
富山市児童クラブ連絡協議会
富山市小学校長会

小学生絵画最優秀賞

●三四年生の部



「未来の富山市」
富山市立大久保小学校4年 田中 沙珠さんの作品

小学生絵画優秀賞

●三四年生の部



「朝と夜の未来の富山市」
富山市立三成小学校4年 石川 莉暖さんの作品

●三四年生の部



「みらいのわたしたち」
富山市立大広田小学校3年 神口 心緒さんの作品

未来の富山市

●五六年生の部



「世界に羽ばたけ富山市」
富山市立大庄小学校5年 雨谷 藍さんの作品

●五六年生の部



「未来の富山駅」
富山市立大広田小学校6年 佐伯 善多さんの作品

●五六年生の部



「富山をガラスでうめつくせ!」
富山市立三成小学校5年 瀬川 紗石さんの作品

未来に語り継ぐ 富山大空襲の記憶

富山大空襲の記憶を未来に語り継ぐため、空襲体験者インタビューや戦禍をくぐり抜けた遺品をホームページで公開し、戦争の悲惨さと平和の大切さを後世に伝えていきます。



HPIはこちら

このプログラムは再生紙を使用しています。

富山大空襲体験文

「怖かった富山空襲」

扇谷

朋美さん

〔令和六年七月寄稿〕

ラジオから流れる「空襲警報発令」の声と、けたたましいサイレンの音を聞くと、すぐに防空頭巾を被り、防空壕に入り、怖くて身動きできず震えていました。米軍機やB二九がさまざまいい音をたてて上空を行き交っています。

しばらくして外に出てみると、神通川より東側の富山市街は、真赤な煙が空迄一面に染めているのを、ただ呆然と見ているだけでした。遠くを走る高山線の列車は赤い帯のように見えました。家の横の稲田の中を人々が、しゃがみながら通って行きます。四才の私は何をしているのかわからず、疎開してきていた曾伯母に尋ねると「誰もが毛布等を被り、身をかめながら逃げているのだよ」と教えられました。何処にいても安全という場所はないのに、じつとしておれなく稲田を腹這いになりながら逃げたのでしうね。

私達家族は「死ぬのなら家で死のう」の母の三言で、防空壕で身を寄せ合っていました。

十三才の兄は、上空を米軍機が飛び交う中、葦屋根の上で竹箒を持ち走り回っていました。

す。家の前では、曾伯父が「ほら右、左」と指図していた姿は今もはっきり思い出せます。火の粉が屋根に落ちないようにと払っていたのです。どんなに怖かったことでしょう。当時、家には、高齢者、女性、子供しかいないのです。

母は阿弥陀如来像を本堂から持ち出し玄関前に来たその時、ヒューンと音がしたので一歩後退したその足元に焼夷弾が落ち、阿弥陀様の片手が落ち、母の命を阿弥陀様が救って下さった一瞬の出来事だったと後に聞きました。

ヒューン、ジュー、焼夷弾が稲田に落ちる音です。

そのような中、「近所の家から煙が出ている。」と言って母達はバケツを持つて走り、その家の横を流れる川からバケツリレーで消し止めたそうです。

このような怖くて長かった二日は、今も脳裏を過ります。翌日、防空壕から出てみると、四角い椅子のような型や細長い六角形のような焼夷弾の燃えがらがいくつも落ちていて、臭いにおいがたちこめていました。

各家の窓ガラスにはテープで目張りがあり、電球には灯りが外に漏れないように黒い布で覆われていました。いつ又「空襲警報発令」が出されるかと誰もが落ちついた生活を送ることができなかつたのだと思います。

私は練兵場(今の五福の県営競技場)の近くの小さな寺で育ちました。毎日、兵隊さんのラッパの音を聞いていました。

何日か後、終戦になり、何軒かの親戚が疎開してきました。早速、庭にコンロを持ち出し食事の準備です。子供達は農道で食べられそうな草を摘んでいました。

「娘の生死がわからない」と泣いている親戚もいました。本堂の中は疎開者で、つたがえしています。

秋になり庭に柿、いちじく、栗が実ると、取り合いの喧嘩で、皆食べるのに必死でした。

先に記した阿弥陀様の件ですが、後に兄は修復するよう母にうながしましたが、母は自分の苦しみは自分で何とかしたいと、やがて国民年金を貯め、京都の本山で修復していただき、母の戦後の夢は、ようやく叶ったのです。そのときの母は涙を流し喜びました。今、まだ他国では争いが続いています。このようなことは絶対しないでください。

小さな命を犠牲にしないでください。

この大空襲を後世に語り継ぎ、これからの世界の全ての人々が戦争を無くし、平和な生活が送られますよう願ってやみません。

「歌うことはつなぐこと」

富山県立山室中学校三年 林 実咲さん
一九四五年八月二日〇時頃、空襲警報が発令され、七四機のB二九が富山市を襲いました。これが「富山大空襲」です。全市街地の九九五パーセントが焼失し、多くの罪なき命が奪われました。このような激しい被害は、地方空襲の中で最も激しいものだといわれています。燃え上がる赤い炎、焼け野原となった富山市……。今も残る当時の写真からは、被害の大きさ、戦争の残こくさが感じられます。そして、「お母さん、お父さん。」と親を探し、泣き叫ぶ子どもの声。「どこにいるの。」と我が子を探し、走り叫ぶ親の声。このような人々の声が写真を越え、私たちの心にもこたましてきます。

このように感じたのは、中学二年の三学期でした。三年生の修学旅行で訪れる広島府の平和学習の一環で、初めて富山大空襲を学びました。広島府の原子爆弾投下は、歴史の学習やニュースで目にするが多かったです。それに対して、富山大空襲は平和学習をするまで何も知りませんでした。富山市で育ってきたのに、過去の富山市での悲劇を知らず、恥ずかしさを感じました。おそらく、富山市の小学生で富山大空襲を深く知る人はごくわずかだと思います。

このままで良いのでしょうか。富山大空襲

中学生作文優秀賞

「興味と関心」

富山県立山中学校三年 小川 夏芽さん
私は、今の富山はとても過ごしやすいと思う。美しい自然があり、美味しい食べ物がたくさんあり、治安もいい。しかし、今の平和な富山が昔からあったわけではない。このすばらしい郷土である富山を受け継ぎ、よりよいまちにしていくなはどうか。

先日、平和学習で富山大空襲について学んだ。今までの私は、火花がある日になにか大変なことが起こったというそれくらいの認識しかなかった。しかし、富山大空襲を調べてみると、どれほど恐ろしく、どれほど悲惨なものだったか、分かった。大変なできごとだと知っていたつもりだったが、今までの私の認識が甘かったのだと痛感した。また、およそ千五百人の子供達が富山県に学童疎開をしていたことを知り、胸が締めつけられる思いだった。親に会えずに空襲で犠牲となった子供、苦しむ子供に会えずにいる親もたくさんいたことだろう。さらに、当時は深刻な食料難で多くの人々がひもじい思いをしていたことも分かった。大空襲から生き延び、戦争が終わったとしても、食料危機が待っている。戦争はなんて幸せにならないのだろうかと思った。

また、先日、修学旅行で東京大空襲・戦災資料センターを訪れた。そこでは、学童疎開をしている子供が書いた手紙

で激しい被害を受けた事実は、変わりません。しかし、私たちの手で二度と同じ出来事を起こさせない未来、変えることはできます。これは、全ての富山市民、世界中が望むことです。そして、その世界をつくり上げ、維持することが、富山大空襲で苦しい思いをされた先人、その状況から努力を重ね、富山市の発展へと導いた先人への恩返しだと思っています。

そのためには、過去から学ぶきっかけが必要です。戦争の記憶を戦争を知らない世代に語り継いでおられる語り部の方のお話を聞くことも一つの方法です。しかし、富山大空襲から八十年が経ち、当時を知る方も減少しています。そこで、これからは別の方法で知るきっかけをつくり、語り継がなければなりません。私は「歌うことはつなぐこと」だと考えます。歌は、世代や国を超え、世界をつなぐ力があります。この力を秘める歌に、戦争の恐ろしさや平和な世界の必要性などの想いを託し、歌い継ぐべきです。私も戦争、平和の歌を所属する合唱団や修学旅行で訪れた広島府平和記念公園で歌いました。歌う度に「平和とは何か。私にできることは何だろうか。」と考え、戦争や空襲について学ぶきっかけになりました。そして、小学生も初めて、戦争の恐ろしさや平和について考えるきっかけになったはずで

これから私は、先人から受け継いだ富山大空襲の記憶を、歌を歌うことで未来につないでいきたいです。

「バトンを担う私達」

富山県立若狭中学校二年 桶谷 百花さん
「富山大空襲 私達に想像することが出来るだろうか。きつと想像よりもはるかに、恐ろしく、残酷な出来事だったに違いない。

八十年前の富山市にアメリカ軍が約百十一分間に渡り、焼夷弾を投下した。町は瞬にして焦土と化し、被災者約十万人、そして約二千七百人の方が亡くなった。

私の祖母の姉である大伯母は現在八十三歳で、富山大空襲の当時は、三才だった。富山市の稲荷町に住んでいたが、疎開して親戚が住む水橋町に居た。その水橋町から見ても分かるくらいに、富山の方向は、真っ赤だったと大伯母は言った。大伯母の記憶に今でも残る、当時の恐ろしさからブルブルと震える手。真っ赤な景色。今でも鮮明に覚えている恐ろしい出来事だったと語ってくれた。あと二日でも親戚の家に、行く日がずれていたら、どれだけの恐ろしさだったのだろうか。

しかし、私のように近親者に当時を生き、語ってくれる人がいるのはあまり多くはないのではないだろうか。当時の経験者は高齢化し、被災の恐ろしさを語ってくれる人は少なくなってきたと耳にしたことがある。

そうなると、こんなにも、恐ろしく残酷な出来事を、今の富山の若い世

代の人達は知らないままということになる。また同じことを繰り返し、何の罪もない人達が犠牲になってしまいかもしれない。そうならないために富山大空襲のことを知り、考えることが大事なのではないだろうか。

八十年前という昔の出来事。富山大空襲のことを多くの人は知らない。でもその中で、「知らない」なら、「知ろう」としなくてはならない。過去の空襲の恐ろしさ、残酷さを私達若い世代が知って、犠牲になった被災者の方々のため、私達の未来のために受け継いでいかないとならない。それは富山に住む者としての義務だと思う。

そして、未来の富山を守っていくのも、私達だ。決して同じことを繰り返さないよう、犠牲者の方々の思いと復興や復旧をしてくださった方々への感謝や、平和な未来を、次の世代にバトンを繋いでいこうと思う。

式典

1.国歌斉唱

2.黙とう

3.開会あいさつ

富山市長 藤井 裕久

4.中学生作文最優秀作品の発表

「歌うことはつなぐこと」 富山県立山室中学校三年 林 実咲さん

5.富山大空襲体験文の朗読

「怖かった富山空襲」 扇谷 朋美さん
朗読／声のライブラリー友の会 山野 尚子さん

6.代表献花及び一般献花

演奏／レーベン弦楽四重奏団
第1ヴァイオリン 渋谷 優花さん
第2ヴァイオリン 藤田 千穂さん
ヴィオラ 嶋 志保子さん
チェロ 富田 祥さん

7.閉会あいさつ

富山市民感謝と誓いのつどい実行委員会 会長 北岡 勝